彦根市埋蔵文化財調査報告書第86集

彦根城下町遺跡第３次発掘調査報告書

―建売住宅建設工事に伴う発掘調査―

令和３年３月

彦根市

例　　言

１．本書は、彦根市京町に所在する彦根城下町遺跡の第３次発掘調査報告書である。

２．調査に関する調整、現地調査ならびに整理調査は彦根市が行った。所在地・調査期間等については以下のとおりである。

　現地調査　　所在地：彦根市京町三丁目102番１
　　調査原因：建売住宅建設工事
　　期間：令和元年９月11日～令和元年10月７日
　整理調査　　期間：令和２年７月１日～令和３年３月31日

３．本調査は、彦根市市長直轄組織文化財課（令和２年４月～彦根市歴史まちづくり部文化財課）が実施した。調査の体制は下記のとおりである。

令和元年度（現地調査）
市長直轄組織参事：山本茂春　副参事：広瀬清隆
文化財課長：松宮智之
主幹兼歴史民俗資料室長：井伊岳夫　課長補佐兼管理係長：牧田歩
主幹兼史跡整備係長：鈴木康浩　主幹：小林　隆　文化財係長：三尾次郎
主査：深谷　覚　主査：林　昭男　主査：戸塚洋輔　主査：田中良輔　主査：多賀公一
主任：斎藤一真　主任：下高大輔（平成30年４月１日～熊本市経済観光局派遣）
主事：秋篠功二（平成30年４月１日～文化庁派遣）　主事：西坊仁志
技師：舟山友祐　技師：内藤　京　臨時職員：沖田陽一　臨時職員：樋口杏奈

令和２年度（整理調査・報告書刊行）
歴史まちづくり部長：広瀬清隆　次長：久保達彦
副参事兼文化財課長：松宮智之
主幹兼歴史民俗資料室長：井伊岳夫　課長補佐兼管理係長：牧田　歩
主幹兼史跡整備係長：鈴木康浩　主幹：小林　隆　文化財係長：三尾次郎
主査：林　昭男　主査：戸塚洋輔　主査：田中良輔　主査：多賀公一　副主査：門西靖子
主任：斎藤一真　主事：北村双葉　主事：西坊仁志
技師：舟山友祐　技師：内藤　京　会計年度任用職員：沖田陽一
会計年度任用職員：樋口杏奈

４．現地調査と整理調査は内藤が担当した。本書で使用した遺構実測図は、久保亮二（調査補助員）、樋口、内藤が作成し、遺物実測図については、樋口、小野直子（会計年度任用職員）が作成した。本書の執筆と編集、遺構・遺物の写真撮影は、内藤が行った。

５．本書で使用した方位は、平面直角座標第Ⅵ系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づく。

６．本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市で保管している。

７．本書で報告する土器の断面と種類の関係は、以下のとおりである。
　土師器　　陶器

目　　次

例言

彦根城下町遺跡（第３次）

１　遺跡の概要 ―― 1

２　調査経過 ―― 2

３　調査成果 ―― 2

（１）基本層位

（２）遺構と遺物

４　総　括 ―― 5

図版

報告書抄録

彦根城下町遺跡（第３次）

１　遺跡の概要

彦根城下町遺跡は、彦根市に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地である。当遺跡は、平成29年（2017）６月19日に「城町円常寺遺跡」を名称変更及び範囲拡張し、新たに埋蔵文化財包蔵地として認定した遺跡である。近年の埋蔵文化財の発掘調査で確認できる成果と天保７年（1836）に作成された「御城下惣絵図」と城下町の様相はほぼ一致していることから、絵図に描かれている城下町の範囲全域を彦根城下町遺跡として指定した。平成30年（2018）～令和元年（2019）に第１次調査、第２次調査を行い、今回の調査は第３次調査にあたる（表１）。

彦根城の築城は慶長９年（1604）に開始され、それとともに城下町の造営も行われた。彦根城は三つの堀によって囲われている。「内曲輪」と呼ばれる内堀と中堀に挟まれた範囲には、おもに重臣の屋敷が置かれ、「外曲輪」と呼ばれる中堀と外堀に挟まれた範囲には、おもに100石から800石前後の中堅家臣の武家屋敷や町屋、寺院などが置かれた。外堀より外側の範囲は、おもに300石以下の知行取家臣や歩行と呼ばれた扶持取家臣の屋敷、足軽組屋敷や町屋などがあった。城下町の全体はおおむね18世紀までに形作られた。

調査地の位置する京町は、七十人町と呼ばれる城下町東部に位置する切米取家臣が居住する地域であった。同地域には、安永３年（1774）11月３日に水流町川嶋喜左衛門より出火した火災により焼失した記録が残る。また文化15年（1818）に記された「御家中家並帳」には小池藤十郎、小倉四郎平などの名前が見受けられ、24俵３人扶持程度の家臣が居住していたようである。

表１　彦根城下町遺跡調査一覧

調査番号	調査地	調査期間	調査原因	調査主体	調査面積	主な時代	主な遺構	文献
第１次	彦根市城町二丁目	2018年4月16日～5月25日	個人住宅	彦根市教育委員会	40.34㎡	江戸時代	道路遺構、石垣	－
第２次	彦根市城町一丁目	2019年1月16日～3月29日	個人住宅	彦根市教育委員会	105.50㎡	江戸時代	建物礎石列、火災痕跡	－
第３次	彦根市京町三丁目	2019年9月11日～10月7日	分譲住宅	彦根市	52.17㎡	江戸時代	礎石、石列	本書

図１　調査区位置図（1/2,500）

図２　御城下惣絵図（彦根城博物館所蔵）

2　調査経過

今回の調査は、建売住宅の建設に伴う文化財保護法第93条の届出及び調査依頼に基づくものである。本調査に先立ち、令和元年６月24日に試掘調査を実施し、城下町に伴う遺構と考えられる石列１条と近世の遺物を確認した。この石列は、開発予定範囲内に広がりを持つと推測されるため、柱状改良工事によって遺構に影響の及ぶ建物部分を調査対象として、令和元年（2019）９月11日から同年10月７日にかけて発掘調査を行った。調査地は、彦根市京町三丁目に位置する。調査面積は52.17㎡である。調査はバックホーにより表土、盛り土の除去を行い、その後、人力により遺構確認などの掘削作業を行った。

3　調査成果

（1）基本層位

調査地の土層堆積状況は大きく７層に分けることができる。１層は、地表面から約0.4mまでは現代の盛土である。２層は、近代以降の盛土である。３層には焼土を含む攪乱が認められるが遺物が出土しないため、時期は不明である。４層は、出土遺物から18世紀以降の遺構面と考えられる。３層の影響により調査地全体に確認することはできないが、北壁西側、東壁中央で確認することができる。北壁では礎石を検出している。５層は、グライ化しているが、出土遺物から17世紀後半の遺構面と考えられる。石列などがこの層の上面に構築されている。４層と５層の境には希薄ではあるが炭化物層が確認できる。６層は、径５㎝の亜円礫を含む砂礫層である。７層は、青灰色粘質土層である。6・7層は遺物を包含しないことから、自然堆積層と考えられる。

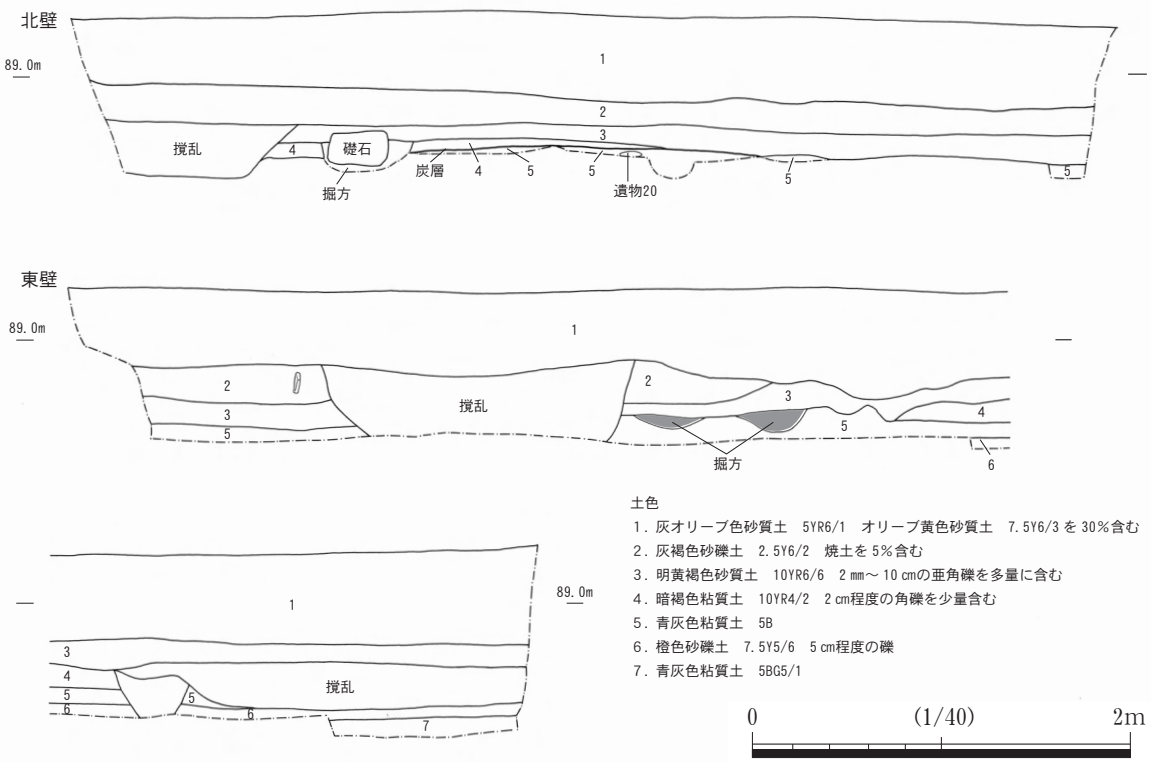

図３　土層断面図

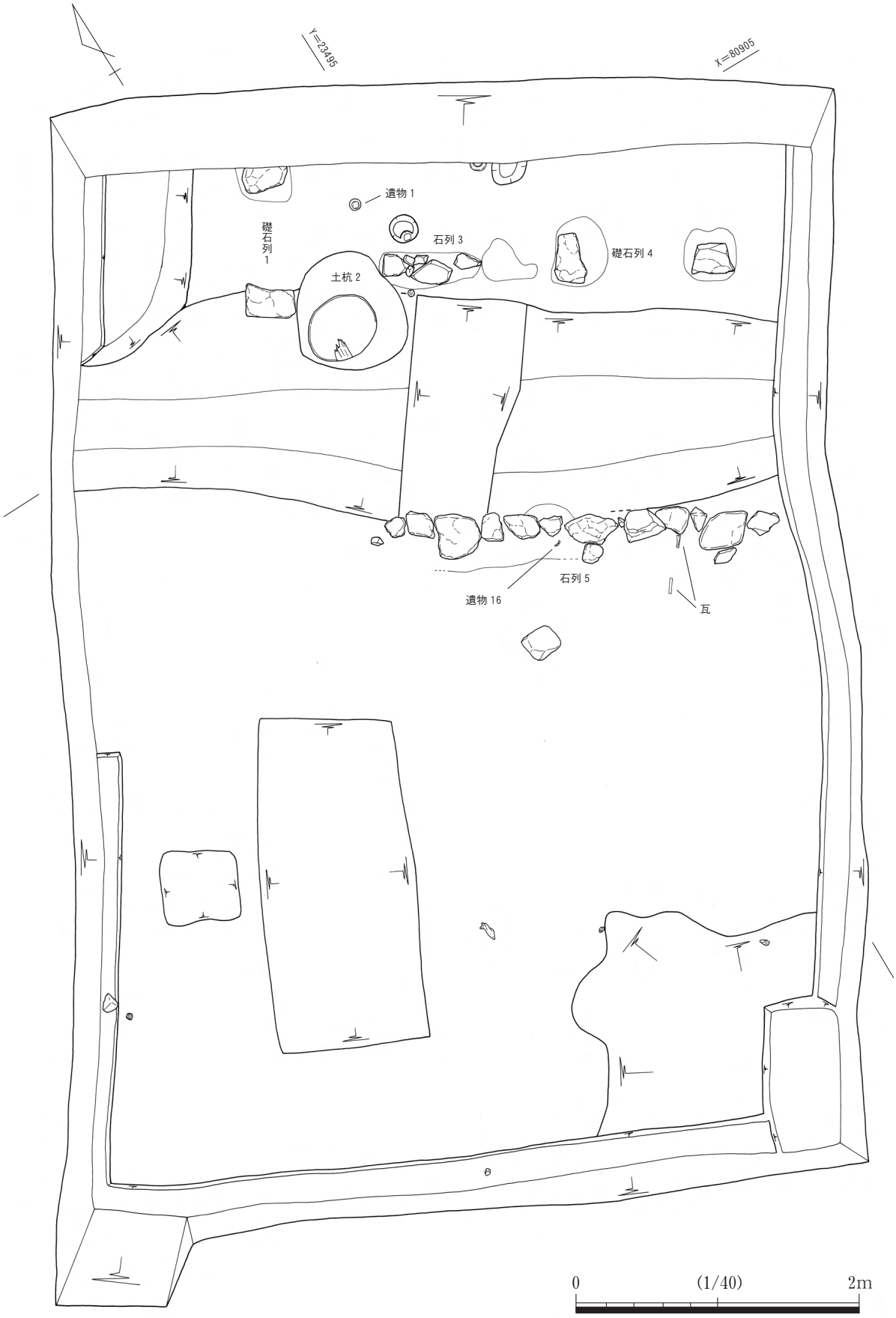

図４　遺構配置図

（２）遺構と遺物

遺構

第１面は調査地の北西に南北２ｍ、東西１ｍの範囲に残存しており、標高約88.7ｍを測る。図３、４層に相当する。検出した遺構は、礎石列１、土坑２である。

礎石列１　調査地の北側で検出した建物跡と考えられる礎石列である。石材は２石確認したのみで、規模は不明である。２石間は0.9ｍで、約３尺である。高さ88.7ｍ付近で平坦面がそろう。絵図からは、調査地より約１ｍ西に道路が認められること、礎石列から約0.6ｍ東で、胞衣壺を検出していることから建物の入り口付近、または建物の西限を検出したものと考えられる。東側では、礎石が確認できない。北壁に層位として確認できることから、調査地外に建物などが残存している可能性もある。

土坑２　木桶を据える土坑である。検出規模は直径0.8ｍ、深さ0.2ｍを測る。内容物がないため、詳細な機能は不明である。木桶は直径0.5ｍ、深さ0.2ｍである。礎石列１と並存するものと考えられる。

第２面に相当する５層は調査地全体に認められ、標高約88.6ｍを測る。遺構が確認できるのは北半のみである。検出した遺構は、石列３、礎石列４、石列５である。

石列３　調査地北側中央に位置する石列である。石材は布掘り状の掘方内に５石程度認められる。石材上端は標高約88.5ｍでそろう。

礎石列４　調査地北東で確認した２石からなる礎石列である。石材間は１ｍと礎石列１同様におおむね３尺で据えられている。石材上端は標高約88.6ｍを測る。南側では、攪乱により断定はできないが、後述する石列５が区画石列と考えられることから、３尺すなわち、半間分広がると考えられる。また北側は調査地外に展開すると考えられる。

石列５　調査地中央東側で検出した石列である。0.18～0.35ｍ程度の石材が12石、東西約2.8ｍの長さで構築されている。石列４との境に幅２ｍ程度の攪乱が存在することから断定は難しいが、区画のために設けられた石列と考えられる。石列は北側に面がそろう。部分的ではあるが、掘方を確認することができ、その状況から布掘り状の掘方であると考えられる。また比較的大きな石材３石が約１ｍの間隔で据えられ、その間を0.2ｍ程度の石材で埋めている。大きな石材は、礎石列４とほぼ等間隔で設置されていることから、礎石等なんらかの基礎の役割を担っていた可能性もある。石列は西側では確認出来なかったが、東壁断面で掘方が確認できることから、調査地外へ広がるものと考えられる。

遺物

１は、第１面から出土した信楽焼の壷である。器高13.5㎝、口径10.2㎝を測る。ケズリ、ナデののち施釉を行う。２～15が内容物として出土していることから胞衣壺と考えられる。時期は18世紀以降のものと考えられる。２から13は１の中に納められていた寛永通宝である。背文はない、いわゆる新寛永である。14・15は、１の中に納められていた瓢箪形の陶器である。長さ4.4㎝、幅3.2㎝、厚さ3.1㎝を測る。型抜きによる成型で、鉄釉が施されている。口縁端部は工具で穿孔され、中空である。16は石列５の掘方埋土中から出土した灰白色を呈する土師器皿である。口径6.8㎝、器高1.7㎝を測る。口縁端部に煤が認められることから灯明皿

として利用されたものである。17～24は第２面から出土した。17・18は土師器皿で、17は口径10.5cm、器高1.9cmを測る。にぶい黄橙色を呈する。18は、口径11.1cm、器高1.8cmを測る。浅黄色を呈する。19は石列５付近で出土した肥前の陶器皿である。復元ではあるが、口径14.8cm、器高1.8cmを測る。内面から腰あたりまで灰色系の釉薬が施される。露胎部は褐色を呈している。口縁端部は外反し、つまみ上げる。特徴から肥前陶器編年Ⅱ期17世紀前半のものであろう。20は瀬戸皿で、口径12.2cm、底部径6.4cm器高2.9cmを測る。にぶい黄橙色を呈する。口縁端部は外反する。全体に内外面ともに釉薬がかかる。御深井系の製品と考え、17世紀ごろのものと思われる。21・22は石列５付近で出土した。21は瀬戸天目で、口径9.7cm、底部径3.7cm、器高6.1cmを測る。16世紀中ごろから17世紀のものである。22は黄瀬戸皿である。復元ではあるが、口径29.6cmを測る。端部は外反し、内側にたたみ、玉縁状になる。17世紀後半から18世紀のものであると考えられる。23は政和通寶である。24は信楽焼の擂鉢、18世紀前半のものである。

４　総　括

今回の調査は、17～18世紀の城下町の一部を確認することができた。第２面では区画と思われる石列５を確認することができた。石列５は、現在の区画と比べるとやや南に位置している。現在の区画は、当時の区画を踏襲しつつ、若干移動しているようである。遺構は希薄であり、江戸時代の環境を詳細に確認することは出来なかった。しかし第１面と第２面の間に炭層を認められ、これは安永３年の火災を示唆する層位である可能性がある。また、石列５の北で建物と思われる礎石列４を確認した。区画石列５との距離が広く、現代の攪乱も認められることから、建物は半間程度南に広がる可能性がある。周辺での調査事例がないことから、当時の居住空間を確認できたことは、ひとつの成果といえる。

参考資料・文献

九州近世陶磁学会　2000『九州陶磁の編年』
滋賀県立安土城考古博物館　2007『城と城下町―彦根藩と膳所藩を中心に―』
畑中英二　2003「信楽焼の編年と年代環」『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版
彦根市　2011『新修彦根市史　第10巻　景観編』
「彦根年代記一」

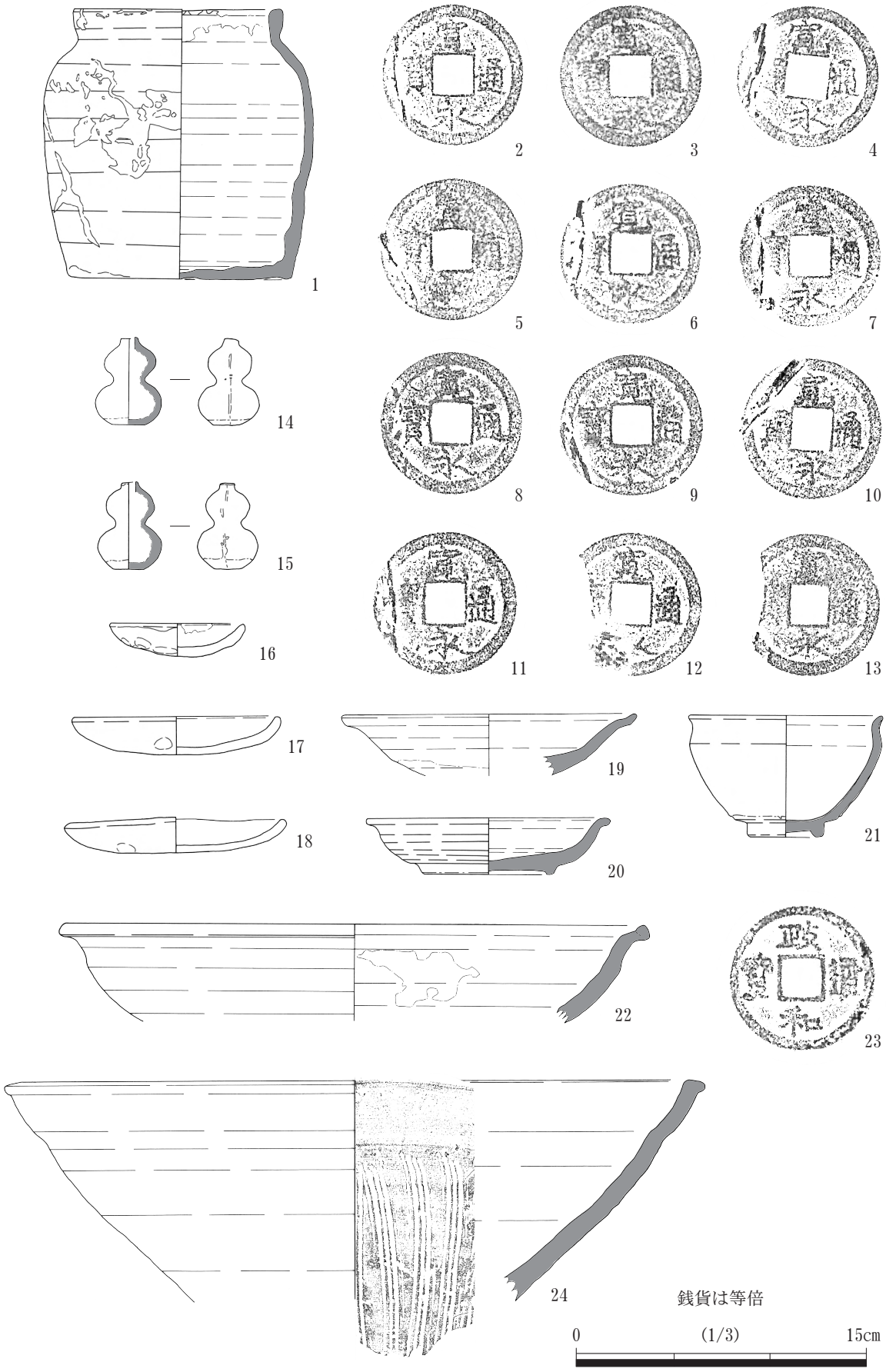
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
銭貨は等倍
0
(1/3)
15cm

図５　遺物実測図

調査区北半全景（南東から）

調査区北半北壁断面（南から）

図版2

調査区北半東壁断面（西から）

石列５（北から）

石列３・礎石列４・石列５検出状況（東から）

胞衣壺出土状況（南から）

図版4

調査区南半全景（東から）

調査区南半東壁断面（西から）

出土遺物

出土遺物

図版6

出土遺物

出土遺物

出土遺物

出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	ひこねじょうかまちいせきだいさんじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	彦根城下町遺跡第３次発掘調査報告書
副書名	建売住宅建設工事に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第86集
編著者名	内藤　京
編集機関	彦根市歴史まちづくり部文化財課
所在地	〒522-0001 彦根市尾末町1番38号　TEL　0749-26-5833
発行年月日	20210331

ふりがな	ふりがな	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ひこねじょうかまち 彦根城下町 いせき 遺跡（第３次）	ひこねし 彦根市 きょうまちさんちょうめ 京町三丁目	25202	008	35度 16分 13秒	136度 15分 29秒	52.17㎡	20190911 ～ 20191007	建売住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・遺物	特記事項
彦根城下町 遺跡（第３次）	城下町跡	近世	礎石、石列 胞衣壺、天目茶碗	

彦根市埋蔵文化財調査報告書第86集

彦根城下町遺跡第３次発掘調査報告書

－建売住宅建設工事に伴う発掘調査－

令和３年(2021年)３月31日発行

編集・発行：彦根市歴史まちづくり部文化財課

彦根市尾末町１番38号

TEL 0749-26-5833

印刷・製本：有限会社田中印刷所

HIKONE CASTLE TOWN SITE 3rd

2021